芥川賞全集 十二

芥川賞全集

第十二巻

文藝春秋

芥川賞全集　第十二巻

著者　高橋三千綱　高橋揆一郎　重兼芳子　青野聰　森禮子　尾辻克彦　吉行理恵

昭和五十八年一月二十五日　第一刷

定価　一八〇〇円

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　理想社印刷所
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本
製函所　加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

Printed in Japan

目次

九月の空　高橋三千綱　5
伸予（のぶよ）　高橋揆一郎　49
やまあいの煙　重兼芳子　107
愚者の夜　青野聰　141
モッキングバードのいる町　森禮子　221
父が消えた　尾辻克彦　273
小さな貴婦人　吉行理恵　309
選評　335
受賞者のことば　421
年譜　427

题　装
字　丁

中　粟
田　屋

功　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芥川賞全集

第十二巻

九月の空

高橋三千綱

（第七十九回　昭和五十三年上半期）

「九月の空」（昭和五十三年八月発行、昭和五十六年二月第十六刷、河出書房新社刊）を底本とした。

試合場になっている体育館に着いたときには、もう個人戦が始まっていた。広い体育館を四つに分け、それぞれの四角い枠の中で、防具を身につけた剣士たちが、掛声も高らかにぶつかり合っている。異様な熱気が勇の軀を包み込んだ。防具袋を背中にかついで、小走りに出場選手名を書いた紙の貼ってある壁に向かった。途中で何度か人とぶつかり、素振りをしている選手の竹刀の下をくぐり抜けた。四つに分かれたブロックのうちから、自分の名前が出ているところを捜し出さなくてはならない。

初めに見上げたのがBブロックの出場選手表だった。出場校が二十三校あり、各校より十名の選手が個人戦に出場しているため、一つのブロックには六十名近い選手の名が書かれている。トーナメント戦だが、六人抜いて初めてブロックの優勝ができ、勝ち残った四人でさらに三多摩の優勝者を決める。六月の大会で勇は初めて個人戦に出場し、二人抜いて三人目で敗れた。勇の高校の出場選手がほとんど一回戦で敗れていたことを思えば、それは善戦といえた。九月の中旬に試合が行なわれるのは、間に夏休みを挟んでいるからで、どの学校の選手も、夏の合宿を終えると見違えるほど強くなり、軀つきもたくましくなってくる。

「なにやってんだ、おまえは次の次だぞ」

血の気が引いていく思いで出場者表を見上げていた勇の肩を、金村が強く叩いた。勇は喉を大きな石で塞がれたような気がして、一瞬、声が出せなかった。

「代わりに白石でも出そうかといっていたんだ。早くこいよ、Cだ、Cだ」

勇は頷くのが精一杯だった。金村は壁の前に立っている学生たちを突きとばすようにして走っていく。そのあとを、勇は何百メートルも泳いだあとのようにだらけきった気分になってついていく。防具から漂う汗と黴の入り混じった匂いと、体育館の天井から響いてくる雄叫びにも似た気合いが、会場の雰囲気にまだ馴染んでいない勇の脚をすくませる。

勇を見つけた田端が、あ、きたきたとわめいた。マジッ

クインキを持っている制服を着た学生に、田端はすでに白石と書き替えられた名を、再び小林に書き直すよう指示している。学生は、珍しく顔を赫らめて興奮している田端の剣幕に押されて、おどおどしながら名前を書き直した。

「おれ防具を持ってきてないし、袴もないしさ、トレパンのままで試合に出ようかと思ってたんだ。助かったよ」

「すまなかった」

少し蒼ざめた顔でいう白石に勇はぺこりと頭を下げた。白石は勇と同じ一年生だが、中学校での剣道の経験もなく、二学期になってからもそれほどの進歩が見られないという布施の意見で、個人戦には出られずにいた。これまでに、公式戦の出場経験が一度もない。

早く着換えろ、と金村にせつかれて、勇はあたふたと防具袋を空けて剣道衣を取り出した。学生服を脱いでいる途中でうらめし気に勇を見ている白石の視線に気付き、悪かった、とあやまった。白石は急に照れた。

下着一枚になった勇を見て、試合を控えて周囲に佇んでいた選手たちは、一様にあきれた面持ちをしていた。主将の布施は別のブロックですでに試合を待っているらしく姿が見えない。金村はしきりに勇をせかし、剣道衣姿になっている田端は防具の紐を解いて床の上に並べている。

一つの試合が終って、次の試合が始まり出したとき、やっと剣道衣をつけ終った。勇の対戦相手は面もつけて、すでに控えの席に坐っている。ひどい気後れを勇は感じていた。あれほど待ち望んでいた今日の試合に、朝寝坊をして遅れてしまったことを地団駄を踏む思いで悔んだ。強い焦燥感のためか下腹部が痺れた。不意に尿意を催した。

「相手はどこのやつだ」

「T大附属だよ」

その名前を聞いて足がすくんだ。宿敵と勇が勝手に思い込んでいる者がその高校にはいたからだ。その者に勝つ自信が、今の勇にはなかった。

「石渡か」

「違うよ、もっと下っ端だ」

金村は勇の胴の紐を結びながらいった。眼の前の試合は、白紐を背中につけた選手が一本先取していた。係員がやってきて、次の選手はだれだ、と怒鳴った。勇が名乗ると早くしろといって、後に白いきれを付けた。

「そういえば、さっき石渡がやってきて、小林の名前を見つけて懐しがっていたよ。あの、森とかいうやつは、相手がおまえだと知ってがっくりきてたぜ、石渡は苦笑してたよ。あいつ、ますますたくましくなったぜ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金村が話している間、勇は軀をほぐしていた。田端が面を持ってきたので床に坐り、手首を回した。面をつけ終ったとき、前の試合が終った。おまえだ、おまえだ、とあわてる田端の声を後に聞きながら、勇は五度、大きく素振りをした。下腹部の痺れはどこかに消えてしまい、肩も軽くなっていた。勝ち名乗りを受けた選手が戻ってくるのと入れ違いに、勇は試合場に立った。

小林、と名を呼ばれた。勇は前に進み出た。相手は勇より背の高い男だったが、眼がしじゅう周囲を窺うように油断なく動き、それが却って、自信のないことの証拠のように勇には思えた。

審判の合図で立ち上がったとき、勇はすっかり落ちつきを取り戻していた。軀の大きい相手が、肩をすぼめて背中を丸めた体勢でヤーヤーと呟くようにしていっているのを、メンでまず仕留めてやろうと思って眺めていた。よく見ていけ、という金村の声が聞こえた。相手の動きが、自分の心の中の鏡を見るように、よく観察できた。

勇は立ち上がった位置から一歩も動かず、気合いを掛けることもなく、正眼に構えていた。相手は腰を振り、脚を前後左右に小まめに動かした。ふと、眼が光った。相手の肩が前にせり出した瞬間、勇は背筋をいっぱいに伸ばし、竹刀を振り下していた。相手の竹刀は勇の面の三寸前で停止し、勇の竹刀は彼の脳天を小気味よい音を響かせて叩きつけていた。間合いと相手が打ってでるタイミングを計ったメン打ちだった。三本の白旗が上げられた。

二本目の始めの合図を待つとき、相手の顔を見ると、赤く脹れ上がっていた。唇が突き出てきたようで、大分焦っていると見えた。よし、と勇は思った。

合図と共に相手の上体はせり上がり、ひと呼吸遅らせて、勇は小手打ちに出た。平たい板を割ったときのような乾いた音が小手から鳴った。相手の腕は上がりかけた状態のまま静止し、その傍を勇はすり抜けた。布施が得意とする出ゴテを勇は決めていた。勝負は、始まってから、三十秒もたたないうちについていた。

「調子がいいじゃないか、夏休み怠けたわりにはさ」

面を脱いだ勇の頭を、金村は叩いた。汗もかいてないや、といった。

「おれもあのメンをやりたいな、合宿でずい分練習したんだけど、どうかな」

田端は耳を掻きながら、ためらいがちにいった。合宿、という言葉を聞くと、気恥かしさが勇の胸に湧く。

「おまえ、旅行に木刀を持っていったっていうけど、本当

か」そう金村が訊いた。

「嘘だよ、そんなの」

勇はそう答えて、手拭いで乾いている首を拭ったが、それは勇の嘘だった。夏休みに入ったその日から勇はリュックサックを背負って旅に出た。以前からの計画だった。牛乳配達をして貯めた金がその資金になっていたがそれだけでは足りず、小学生のときから集めていた切手や古銭を売り払ってなんとか都合をつけた。それでも、初めに予定していたぶんの三分の一にも満たなかった。

リュックサックからは、木刀の柄がはみ出していた。剣舞用のもので、三尺三分と短かった。山道を歩きながら、その木刀で光を斬ってみようというのが当初の目(もく)ろみだったが、ほとんど実行することはできなかった。ひと月半かけて、勇は東北と北海道を、ほぼ一周した。野宿をすることもあって、そのときは米を買って飯盒(はんごう)で炊いた。帰ってきたときは三キロ痩せていた。学校はすでに始まっていて、二日遅れて登校したとき、担任の横山先生は、原因が旅行のためだと知って、唇をきつつきのように尖らせて怒った。それから説教が始まり、そのため授業時間の半分がつぶれた。

二学期になって以来、勇は剣道の練習を、道場での稽古数も入れて、五回しかやっていない。試合を終えた今は、軀が軽くなっているような気がしていたが、実際に素振りをしてみると、腰から下が重しをぶら下げられたように沈み込んでいく。脚が前に出ない。ちょっと強い相手だったら、簡単にやられていただろうと勇は思った。

勇は壁際に下って、面を床の上に置いた。次の試合までには、一時間近く待たなくてはならなかった。トーナメント表を見ると、金村は一回戦のほぼ中程で、田端は二試合後に試合を控えている。田端は耳たぶを桃色に染めて、金村の注意をおとなしく頷いて聞きながら垂れをつけている。田端にとっては初の公式戦だ。上がらなければよいがと勇は思った。

ほぼ六週間ぶりで勇が竹刀を手にして練習に臨んだとき、まず初めに田端の著しい成長に眼を瞠った。中段に構える姿勢に落ちつきが出ていた。気合いを掛けて突っかけてもそれほどあわてることなく、相手の動きをじっと見ている。自信がでてきたな、と思って勇がふと気をゆるめた隙に、小手を狙われた。かろうじてはずしたが、不意をつかれたため、反撃はできなかった。

一学期の間は、部をやめようかどうしようか迷っていた田端が、夏を越すと、とたんに剣士になったことに、勇は

驚きを越えて、畏怖すら感じていた。一本がはずされてもためらうことなく、二段、三段と打ってくる。胴を抜いても、頓着することなくメン、メン、と叫んでくる。何本勇がメンを取り、ドーを入れても、無邪気とも思える元気さで突っかかってくる。とうとう練習から遠ざかっていた勇の方があごを出して、打ち合いを中止した。勇が三本とると、田端は確実に一本取り返してきた。それまで、田端の竹刀が正確に勇のメンをとらえたことなどなかったのだ。

「どうしてそんなに強くなったんだ」

その日の練習が終ったあと、水道の蛇口の下に足を突き出して洗いながら、勇は田端に聞いた。

「合宿で鍛えられたから」

と田端はいった。少女のように瑞々(みずみず)しい頬をしていた。

「はじめは合宿に入るのがこわくてさ、どうせ続きっこないし、弱いしさ。でも、やっているうちに慣れてきて、なんか日常みたいになってさ」

「日常？」

奇妙な言葉を聞いたような気がして、勇は訊き返した。田端は少しどもった。

「いや、その、練習するのが日課になって、どうせなら、小林のいないうちに強くなって驚かせてやろうと思ったんだ」

「驚いたよ」

「小林だけだもんな、合宿不参加を許されたのは」

「旅行は前からの予定だったんだ」

「おれだってそんな予定作りたかったさ。でも、だめだっていわれるに決まっているし、部をやめるのも、しゃくだし。弱いからって部をやめたら、本当に弱くなっちゃうものな」

「おまえ、なんかすごくなったな」

勇の言葉を冗談ととったのか、田端は朗らかな笑い声をたてた。十日間の合宿と、夏休みの間ほぼ毎日続いた稽古に、田端は一度も休むことなく出てきたと勇は聞いていた。中学生のときには特別に何のスポーツもしていなかった彼に、毎日の生活の中で剣道が単なる運動以上の重味をもってきたのだろうと勇は思った。

旅に出る前まで、勇は不思議ないらだたしさを感じていた。このまま外に出ることなく、高校の体育館の中でずっと過ごしていては、永久にほかの人間たちと話す機会をもてなくなるのではないかと考えたりした。

そんな考えを持ったのは初めてではなかった。小学校では、毎日同じ数の生徒の中で、そのうち数名とだけしか会

話をもてないことを残念がってみたり、中学生になると、家に帰ってから、学校やその途中にある街角に、大きな落し物や忘れ物をしてきたのではないかと感ずることもあった。今日は、級友以外ではパン屋の親爺と話しただけだと思い出したりして、自分の胸の中に描かれた世界が、日を追うごとに狭まっていくような気がしていた。

旅は勇の眼を外に向け、今まで知りようもなかった人々と出会う一つの機会を与えてくれた。道端に佇む老人の訛りの混じった言葉から、彼の生きてきた証しを読みとり、また、それを見つける自分の感性を知ることも喜びの一つだった。未知の土地に未知の人が生きていることを知ることだけでも、勇は自身が息づいているのに気付くことができた。

放射線状に人の群れに向かって関心が伸びていくにつれ、勇は芽生えはじめた自分だけの眼差しをますます大事にする気持が強まった。他人に眼を向けることに夢中になり過ぎて、いつの間にか他人に同化し、自分が溶けてしまうことを恐れた。地べたを這うようにして生活してきた人々の生き方の強さを見ても、決して侵されることのない、自分の胸の内にある心棒を太く強く育てることの必要を感じていた。

十五歳の勇にとっては、剣道をしている最中に感じる緊張感がこの世で最も信用できることの一つに思えた。剣道が単なるスポーツであると割りきってはいても、それから得たものは忘れ難く思え、たとえば今まで感じていた孤独感は甘えた心から出ていたものだといった幼稚な発見ではあっても、勇にしてみれば大事なことだった。

勇は一人ぽつねんとしていることが好きではない。また、その状況を楽しむ余裕はない。孤独な人だと自分をなぐさめるのもおかしい。剣道をやりはじめて、一人でいる自分の中に没頭することを覚えたのは、小さな収穫でもあった。三尺の間合いをとって見知らぬ相手と対峙しているとき、他人を頼りにできない苦痛と不安と共に、ごく平凡な孤独感以上の、透明な孤立感を覚える。それが勇を剣道に向かわせる。にせものではない、現在の勇にとっては、それが本当の自分だけの、他人につけ入る余地を与えない世界だった。旅先で、たとえどのような厳しい自然条件の中で生きている人を見ても、勇は胸の底に氷のつぶのように芽生え始めた自分の世界が脅かされることはないと知った。

夏の合宿に出ないことは、剣道の技術を伸ばす大切なチャンスを失うことを意味した。だが、勇にはもう一つの不安があった。決められた相手と練習を積むだけでは、剣道

が上達する以前に、剣道という運動に狎れ合ってしまうのではないかと思ったのだ。それでは剣道をしているときに感じる孤立感すらも、全ての計算と予定のうちに生まれ、狎れ合いのうちに慣れきったゆるみのあるものになってしまうと恐れた。そうなると剣道すらも勇の日常にとっては家や学校に対する気晴しの道具にしかならなくなってしまう。高校生の勇から剣道をとってしまうと、自分の世界を覗き込む心棒がなくなり、何をよりどころに他者やその人生を判断したらよいのか分からなくなる。先輩たちの冷たい視線を受けながらも旅に出たのは、未知の人と会いたいと思うことと共に、馴染んだ学校の剣道から離れてみたいという勇のわがままが働いたためだ。

土地の人と会うほかに、勇は旅先でいくつかの面白い体験をした。持金が乏しいため食事を抜いて汽車に乗り、やがて、空腹のあまり気分が悪くなり、車中で脂汗を流し、苦い液体を吐いたりしながら、誰も救ってくれる人もなく、また救ってくれるように頼むこともできない中で、結局強引に眠り込むほかなかったことが、その苦しみから救ってくれることになったと知ったときのあまりに単純であたり前の事実に、勇は喜んだ。ふと、剣道の試合の最中、圧迫してくる相手の迫力に打ちかつのは、相手の眼を見て動きを合わせるのではなく、軀中の筋力をやわらげて眠ってしまうことではないのかと思ったものだった。

また、北海道の南西部にある断崖沿いの原野を、肩まである熊笹を木刀で切り倒しながら道を作って歩いているとき、ひょいと熊に出喰したことがあった。そこはある村と別の村との間にあるエアーポケットのようになった人家のない地域で、北に向かって歩く勇の左耳に岸壁に打ち寄せる波音が届き、見渡す限りが熊笹の海だった。戦後一度だけ北大の山岳部の一行がその原野を横切ろうと試みたが、途中で道に迷って引き返してきたという。進んでいく内に、それまであった獣道らしいものはなくなり、それでも勇は冷やかな風と大きな空の下を比較的暢気に、鼻歌などを口ずさみながら歩いていた。

そんな勇の前に、だしぬけに黒い剛毛が出てきた。始めは岩かと思い、その次に熊の尻だと知って啞然とした。突然のことで、恐怖を感じる暇もなく、魂が抜けた。次の瞬間、熊は熊笹の中に姿を消した。やにわに勇は大声を放った。ヤーといった気もするし、ギャッといった気もする。熊が出るから気をつけろと、村の人にいわれてきたが、本当に出るとは思わず、無邪気な挑戦心も湧いて、出たらやっつけてやろうと思ったりしていた。

熊はまだ子供だったらしく、笹を食うのに夢中で勇の足音には気付かなかったらしい。それでも勇が二メートル後に立つと、さすがに感じるものがあって、逃げ出したのだろう。再び歩き出しながら、勇は足が石のように固くなっているのを感じていた。そして、熊を見たときに勇を襲った、底のない虚脱感のようなものを思い出していた。孤独とか、人を頼れない孤立といったものを越えて、死を常識とした無防備な状態で、相手の軀全体を眺めていた。ほんの刹那ではあったが、熊の尻にぽっかりと白い穴が開き、そこを突つけば熊は消えてしまうという錯覚にとらわれた。熊は一度も振り返らなかったが、なんだか勇は、熊がこちらを見ずに逃げだすことを、とっさに見抜いたような気がしたものだった。

六時間かけて原野を歩き抜き、汗びっしょりになって予定の村に着いたとき、村人から、バスの発着する村までさらに三時間歩かなくてはならないと聞かされて、勇は地べたに坐り込んでしまったものだった。

ヤァーッ、と田端は気合いを掛けた。相手は田端より長身で、田端の声に負けじと、上から押さえ込むように気合いを放った。その相手の構え方を見て、初段だな、と勇は思った。

田端は肘から先をこまめに揺すって前に押し出し、右回りに接近していく。相手も田端の動きに合わせて円を描く。完全に位置が入れ換ったとき、相手が突っかけてきた。田端はかろうじて、強い力で振り下された竹刀をよけて、後に跳んだ。

気圧(けお)されてる、と勇は思った。田端の肩が縮まっていた。相手の男は低い声を出して、足を前後に、規則正しいリズムで送りながら、間合いを縮めていく。その足の送りを、勇は凝視していた。

鋭い気合いを発して彼は田端にとび込んだ。受けた田端の腕が上がり、相手の竹刀はものの見事に田端の面を打ちすえた。打たれた田端は、腰を引いて、上体だけをかろうじて真上に伸ばしていた。典型的なへっぴり腰だった。それは、初心者のころの田端が、相手からメンを打たれるたびにやった仕種だった。よけているつもりが、腕をいたずらに伸ばしてしまうため、かえって面が空いてしまう。腕が違う、と勇は思った。

審判が二人の竹刀の先を合わせて、二本目の試合を始めようとしたとき、勇は、タイム、と大声で怒鳴った。怒鳴ってから、その場に居合わせた者全員が、こわばった表情

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com